

# 「木を植える文化」と都市生活

インタビュー

富山和子

- 一——利用してこそ守れる自然
- 二——失われる「木を植える文化」
- 三——子供の頃から草木を育てる

一——利用してこそ守れる自然

編集部 このところ「緑を守れ」の  
声が高まっており、具体的な運動も  
起きていますが、どのように感じて  
おられますか。

富山 近頃は「緑、緑」と緑がブー  
ムのようになっているのは大変結構  
なことです。つい最近までは、「緑」  
といえば、何をいまさら道楽のよう  
なことを言うかというような目で見  
られたものです。例えば水不足で大  
騒ぎをしていた年でさえ、水を語る  
場合に水と森林を結びつけることす

らなかつたのです。それと比べ  
と、最近の緑のブームは隔世の感が  
あります。けれども「緑」がムード  
で語られていて、自然というものが  
どこまでわかっているのかなとい  
う感じがします。

編集部 「わかっていない」一番大  
きな点はどういうことですか。

富山 緑を守るといふことは、緑を  
守る人間を守ることなのです。日本  
列島の七割は森林で、山村の林業者  
が支えてきました。ところがその人  
たちに担い手がなくなってきた  
のです。もちろん都市の緑もいろいろ

ろあるけれど、「緑」という場合は  
日本列島の大部分を占める緑の担い  
手がいなくなるということが歴史始  
まって以来の大変な危機だと思いの  
ですけれど、今の緑ブームの中でも  
関係者以外には危機感を持たれてい  
ない。何ひとつ財政的措置がなされ  
たとはいえない。依然として過疎が  
進行する一方です。

編集部 それをくいよめる基本は何  
でしょうか。

富山 いちばんの基本は、山村でも  
都市でもそうですが、自然というも  
のは人間が利用しない限り守れない

ということ。木を薪として使わ  
ない、木炭として使わない、木材と  
して使わないから林業が衰退するの  
です。川でもそうです。川の漁業を  
大事にしない。舟運もなくなった。

利用しなくなれば皆は川に背を向け  
て、川がゴミ捨て場になっていく、  
洪水の捨て場でもあるわけです。海  
も漁民が漁業権を放棄したときか  
ら、汚染がいよいよひどくなってい  
たといえます。

都市の緑にしても、眺めるだけの  
緑であつたから、経済性がない  
ということ、残すためのお金が出

ないわけです。何かあったときに最初に潰されていきます。

つい最近まで、川でも緑でも、ひとつのものを総合的に使っていたのです。川は農業用水であり、魚が獲れる場所であり、舟運の場所でもあった。防火用水でもあった。そのようにものごとをトータルな目で見れば、緑についても利用価値は数多くあるはずです。都市の緑でも、河川源流域の緑でも、緑があるからこそ、土地は土地として実現している。つまり緑が洪水の防止に役立っているわけでしょう。

これは逆に考えればよいのです。宇沢弘文さんが「自動車の社会的費用」(岩波新書)の中で、自動車一台を走らせるのに、あの本の出た四十年代当時で、一〇〇万円の社会的費用がかかるというのを算出しています。同じように、緑を減らすことによってどれだけの治水対策をしなればならないか、どれだけの環境整備をしなればならないか、どれだけ精神的にも疲れ、休日に緑を求めて遠出をしなければならぬか

といった類いのことを計算していけば、膨大なものになると思います。そういう目でトータルに見れば、都市の緑といえども実用という意味で

有用性が出てくると思うのです。都市の緑であっても果物の木であってもよいではないか、果物の並木があってもよいではないか、誰が取ったで喧嘩したらそれもよいではないか、それが街というものではないか、かと思うのです。川だったら鯉を飼って将来確実にやってくる食料危機に備える。市内の川で漁業をすればよい。横浜市で林業を起せばよいではないですか、と私は言いたいのです。桜並木が大事なら、少し並木

帯を広くとって、例えば皮細工に木の皮を利用する、という考え方があってもよいでしょう。秋田では桜の皮細工を輸出していますが、足りなくてどんどん桜を植えています。可能な限り木を木材として使っていくことです。例えばドイツの公園では丸太がどんどん切り出されています。都市の公園でも木材を生産してよいのだし、またその土で下水を

浄化してよいのです。せめて公園の周りの建物の汚れ物くらは公園へ還元して肥料にすればよいではありませんか。

現実には実用性があるのに評価されていないものは評価しなすという作業が必要ではないだろうかと思えます。

南イングランドのある町では、垣根が町の景観を保っていて、町の誇りになっています。けれどもその垣根まで、町では木材資源として計上しているのです。そういう発想がわれわれにもあってもよいのではないかと、思います。

編集部 そこまではなかなか気がつかないものですね。

富山 日本の並木の歴史は古くて、大和朝廷ができたときに既に国家的規模で並木道を作っているのです。

その時代に並木道を作っているという事は、それよりも何世紀か以前から、庶民のレベルでは木を植えることを知っていたということです。むしろ当時は眺めるために植えたはずはなく、並木の目的は、旅人の命

を救うためでした。木陰で身体を休める。雨や風もしのげる。木の実をたべる。従って古代の並木は果物の並木でした。柿や梨らしいです。

こういうことは皆知らないのです。が、知ったらナルホドと今の問題に結びつけられよいのです。誰が何をどう守って養ってきたかの歴史を見ないと、自然保護まで間違ってしまう。太古の時代から植えて手をかけ、維持されてきたのが日本の自然です。そういう歴史を見れば、いかに山村が大事かわかります。それは実用のために植えてきたのであって、道楽のために植えてきたのではないのです。

では今はどうかという、山村の緑は利用しないからどんどん守られなくなっています。武蔵野の雑木林も、利用しないから林業がやっていけなくなつてつぶされてきたのです。今の林業はそれだけではやっていけないでしょうけれど、でも眺めるだけでやっていけるかという、なおやっつけていけない。だったら両方の考え方を融合させて、都市の緑に

も実用性を持たせるべきだと思おうのです。

## 二——失われる「木を植える文化」

**編集部** 日本の緑がどんどん減ってきているのには、都市の膨張が大きな原因になっています。

**富山** 緑を語るならまず水を見てほしい。私は水に即した土地利用を進めさえすれば、緑の環境は自ずから守れると思っています。土地というのは、治水があつてはじめてできたわけです。その治水を基本にして土地利用を考えれば、それも堤防だけでなく、緑があつてはじめて水が治まるのだという日本古来の考え方を捨てさえしなければ、今のようなこれほどの都市の過密化は、とてもできなかつたと思います。

水資源に対しても同様で、足元では水を捨て、水は遠くから持つてくればよいという発想ではなくて、その地域の水の量に見合った土地利用しかできないという節度があつたなら、これほどまでの過密と過疎は

起りえなかつたでしょう。その意味で水思想をもう一度とり戻せと申し上げているわけです。

**編集部** 「緑を守れ」という声は、「生活環境の整った快的な都市生活」の延長上で緑を望んでいて、その「快的な都市生活の追求」が大きくみれば日本国土や世界の緑破壊の原因となつていふことに、案外気づいていないように見受けられます。

**富山** 私たちは身の回りにどれだけ緑に依存しているか、もう一度見直してほしい。鉄筋コンクリートの建物でも内装にはずいぶん木材製品を使っています。紙にもインクにも、アイスクリームの安定剤にまで、森林の産物は使われています。畑の土も元はといえば森林の産物であるし、あなたの飲む水道の水も森林があつてこそ確保できるものです。

いま日本では一人年間一立方メートルの木材を使っています。これには木製品や紙だけでなく、木材から作られるすべてを含んでいます。国産材はそのうち三分の一にすぎません。つまり外材に頼りすぎたがため

に、山村がさびれ、国産材の担い手を失いつつあるのです。

しかし世界の木材の浪費は頭打ちになりつつあります。森林資源が減つてきているのと、木材資源国でも簡単に輸出しなくなつてきています。外材に頼れなくなつたときに、では国産材とはいえ、その時には担い手がいなくて国産材が不足するという恐ろしいことになります。

**編集部** 外材に大きく依存する結果日本は世界一の木材輸入国ですが、それが地球規模で進行する緑の喪失にもつながつていふと思われま

**富山** いま地球規模で緑がどんどん失われています。これは気象まで変えるだろうと言われています。どのような汚染よりも、この地球規模の砂漠化が恐ろしいという学者も大勢います。これには先進国の木材浪費のほか、アフリカや東南アジアで行われている焼畑農業も原因の一つと考えられています。先進国の人たちは焼畑をいけないと簡単に言いますが、焼畑もやり方によつては合理的なものなのです。山を焼くから、

薪を使うからいけないと単純に言えない。それよりも、現地に出かけてコツコツと植林指導に汗流している人たちがいることを評価してほしいのです。

昨年フィリピンへ行きました。二世紀もかけて緑を破壊してコンクリートのように固くなった山また山が続く所で、日本人が黙々と木を植えているのを見ました。そこはドイツもスエーデンも緑化を試みて失敗し、フランスもやろうとして調査はしたけれどあきらめて引き上げた、世界の技術から見放された荒地です。そこへ日本人が行つて成功させているのです。感動的な光景でした。

木を植える大事さを現地の人には知らないのです。木が育つて森林になつてしまふと働き場所がなくなるのではないかと恐れて、自分で植えた木が育つと放火してしまふというシヨッキングな話をいくつも聞きました。そういう所で植林の技術と植林の大事さをわかつていただくようにしなければ、植林は成功しません。

つまり現地に対しては異質な文化を注入することなのです。日本の木を植えてきた文化と、外国の木を破壊する一方だった文化とは異質なのです。太古の昔から木を植えついできたのは日本だけでしょう。歴史を評価してほしいというのはそういうことなのです。そういうことを抜きにして自然保護を言っていると、木を植えてきた労働の大事さを見失うのではないかと思います。

三——子供の頃から草木を育てる  
編集部 その木を植えてきた山村の担い手がいま失われようとしているということですね。

富山 都市の人は森林にはぐくまれた水を飲料水として毎日飲んでいますが、大雨が降っても戦後すぐの頃のように大水害にならずにすんでいるのは、山村の人びとが戦後一千万ヘクタールも植えてきた山の緑のおかげなのです。都市は遠い山の緑から大変な恩恵を受けているのですが、都市の人びとがこのことにとっても鈍

感なのですね。

山村にテコ入れせよ、上流にいろんな意味で投資をせよと、私は言ってきました。それは過疎の人が気の毒だから言っているのではないのです。それが都市に直結するから、民族の存亡を担っているのが山村の人たちだから、私は申し上げてきたのです。

日本の世論は都市の人たちが形成するようになっていきます。その都市の人たちが山村の問題を理解するようにならないければ、山村に対する対策がひとつもできない。都市の人たちがまず理屈の上でわからなければいけないのです。それには子供のうちから緑の大事さや緑を養ってきた人たちのことを、歴史まで含めて教えていくことが必要です。これは遠大な仕事ですが、そう思って私は、子供向きの本を書き始めたのです（編集部注Ⅱ富山和子著「川は生きている」「道は生きている」「森は生きている」各講談社刊）。

編集部 日常の暮しの中で都市の間がそれに気づいていく具体的な方

法はないものでしょうか。

富山 何といっても子供の頃から縁と接しなければ駄目ですし、それも自分で手をかけて木や草を育てるのが大事です。子供を芋堀りに連れて行くのも大事ですが、それよりも自分で芋を育てさせるのです。自分のうちにわずかでも土があれば土いじりをさせるとか、それぞれの人ができる中で自然に接する努力をする。

学校でも、林間学校が今では観光旅行になっていきますが、一時間でもよいから山の下草刈りをさせるとよい。場合によってはそれがその子の一生を変えるかもしれないのです。そんな場所を探したいといわれるなら過疎の所ではどこだって喜んで提携してくれると思います。

昔のように、必要があつて畑や木に依存する生活をしていけば、自然教育なんか必要ないのですが、現代は自然と全く接しない生活になっていきますから、こればかりは気づいた人から意識的にやっていくしかないのです。

これは教育の場でやってほしい。

木を植える、育てる作業を学校場でやってほしい。

ただ、自然とつきあうのには常に危険が伴います。それを親の側が理解しないと、学校は何もできませんね。

編集部 横浜にも学校林を持っている学校がありまして、何年にもわたって子供たちが木を植え、下草を刈って育てています（『調査季報』59号・昭和五十三年九月）。

富山 都会の学校こそ、みんな学校林を持ってほしいですね。そういうことが子供の教育を本来の健康なものにするのではないですか。各学校が近くに森林を持ち、それが即ち都市の緑の一環となれば、こんなよいことはないですよ。学校の教材として必要だという形でどの学校も学校林をつくるようにしていけば、おのずから都市の緑は増えるわけですから。緑の利用価値を見出すとは、そういうことなのです。△評論家▽  
(構成・文責編集部)